琉球大学学術リポジトリ

石垣島における同所的に生息するハナサキガエル２種の活動性と場所利用

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学21世紀COEプログラム
	公開日: 2009-04-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 大西, 拓, 太田, 英利, Onishi, Taku, Ota, Hidetoshi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9845

PS-19　石垣島における同所的に生息するハナサキガエル2種の活動性と場所利用

(Activity and habitat use of the sympatric tip-nosed frogs, *Rana utsunomiyaorum* and *R. supranarina*, on Ishigashijima of the southern Ryukyus, Japan)

大西 拓[1]・太田英利[2]
(Taku Onishi and Hidetoshi Ota)

[1]琉球大学大学院理工学研究科　[2]琉球大学熱帯生物圏研究センター

八重山諸島石垣島の於茂登岳の名蔵川上流域と周辺の林床において，同所的に生息するコガタハナサキガエルとオオハナサキガエルの活動性と場所利用について調査した．沢沿いでの調査は2004年11月～2007年4月の間に月1～2回，林床での調査は2008年4月～2009年1月の間に2ヶ月に1～2回の頻度で行なった．それぞれの調査ではあらかじめ設定した176 m（沢沿い），250 m（林床）のセンサスルートを2日連続で巡回し，カエルを発見した場合は位置と環境を記録し，採集した個体は性別を調べ，頭胴長，体重を測定した．メスに関しては背面から灯火を当て，透過光下で腹腔内の卵の有無を確認した．卵が確認された場合には，目測で大型と判断した2個分の卵径を測定した．

両種ともに林床に比べ，沢沿いでの性比はオスに大きく偏り，上陸後，林床で成長，成熟し，沢沿いに移動してきたオスの多くが，そのまま沢周辺に留まることが示唆された．この傾向はコガタハナサキガエルでより強かった．林床でのコガタハナサキガエルや，沢沿いと林床の両方でのオオハナサキガエルは再捕獲率が低く，林床での2日連続の捕獲はオオハナサキガエルで1例記録されたのみであった．このような結果が，いずれの種も林床では1ヵ所に留まることなく広い範囲を動き回ること，オオハナサキガエルについては沢沿いでも1ヵ所に留まらないことを示唆している．未成熟個体は，沢沿いの調査で発見された全固体の5%以下に過ぎず，確認できた場所も限られ，成体が多く見られた河床ではほとんど見られなかった．林床での未成熟個体の捕獲割合は両種とも30%前後と，はるかに高かった．胃内容物が認められた個体の割合は，沢沿いに比べ林床で高く，林床では両種とも90%以上であった．以上から，上陸した個体は，まず林床に移動して，そこで成長すること，成体はコガタハナサキガエルではオスは沢沿いで比較的長期間滞在し，同種のメスやオオハナサキガエルでは沢沿いで短期間滞在していることを示唆している．